

華国鋒は第二の毛沢東になれるか？

文化大革命は大いなる虚妄だった…「毛王朝」の劇的な終わり

中嶋 嶺雄

(東京外大助教授)

やはり文化大革命は大いなる虚妄であった。思えば一九六六年秋、当時の『読売新聞』が紅衛兵運動に揺れる文革中国の実像をありのまま読者に伝えようと試みたシリーズ「これが中国だ」を企画して、私とその特別機動特派員を委嘱され、中国各地を訪れてから、ちょうど十年の歳月がたっている。だが、この十年は、中国民衆にとって、

の民衆はいま、文化大革命をなんと説明し、なんと総括するのであろうか。

は「帝王」の死は、まさに「解き放たれた死」なのであった。

憲法と党規約において法制的に内在させている今日の中国において、いわゆる集団指導制は現行政治体制のもとではそもそも問題になり得ず、「主席」の地位は圧倒的かつ絶対的なものである。毛沢東なきあとの党主席選任をめぐって党中央の不協和音が一挙に増幅したであろうことはいうまでもない。加えて、中国の「政治文化」の特質からしても、社会主義権力の前例からしても、また、中国という広大な国家を統合してゆくた

めのシンボルの必要性からしても、集団指導制などを受け入れることのできない政治的現実があった。

休息なき激動の相次いだ歳月であつたのみならず、一年が数年にも相当する『耐え』の歳月ではなかつたか。

それが慄然とするほどの苛烈なドラマであつたにせよ、文革派がこうして一挙に失墜してみると、それまで毛沢東神話に陶醉していた人びとでさえ、過去十年間の中国の政治にはあまりにも無理と理不尽が多すぎたことに気づき、文化大革命が畢竟、大いなる虚妄であつたことに目覚めるであらう。いや、中国民衆は、すでにそのことを十分に知りつくしており、いざれ今日の来るべきことを心に期しているのかもしれない。その意味で

霊前で喪主たちは一挙に打ちとられた

問題になり得ず、「主席」の地位は圧倒的かつ絶対的なものである。毛沢東なきあとの党主席選任をめぐって党中央の不協和音が一挙に増幅したであろうことはいうまでもない。加えて、中国の「政治文化」の特質からしても、社会主義権力の前例からしても、また、中国という広大な国家を統合してゆくた

それだけに党主席選任問題は不可避的な摩擦を伴う宿命にたつたが、しかし、先にも述べたように、今回の出来事は、党主席選任問題がこじれたから一挙に文革派がやられたのではなく、そもそも、「帝王」の死を待って「だれがだれを食うか」の状況が潜在していたのだと見るべきであらう。

特集 いま中国で起きている全事実

その十年間、毛沢東体制を支えて中国の政治を方向づけ、まさに「帝王」の威を借りて「階級闘争」の名のもとに政治をほし、いままでしてきたいわゆる文革派の最高指導者たち、江青夫人、王洪文、張春橋、姚文元らの面々が、今回、一網打尽に打つてとられたという。この衝撃的なドラマを面前にして、中国

それが慄然とするほどの苛烈なドラマであつたにせよ、文革派がこうして一挙に失墜してみると、それまで毛沢東神話に陶醉していた人びとでさえ、過去十年間の中国の政治にはあまりにも無理と理不尽が多すぎたことに気づき、文化大革命が畢竟、大いなる虚妄であつたことに目覚めるであらう。いや、中国民衆は、すでにそのことを十分に知りつくしており、いざれ今日の来るべきことを心に期しているのかもしれない。その意味で

このすさまじき「背徳」。だが、そのような行為をあえて犯さざるを得ないほどに、中国の権力中枢における角逐は過熱化していったのであり、皮肉にも、文革派の指導者たちがこれまでしばしば強調してきたとおりの激烈な「階級闘争」「食うか食われるかの闘争」がそこには存在していたのである。

それにしても、去る四月の天安門事件に際して暴動民衆を徹底的に鎮圧した首都工人民兵や中央警衛団としての北京衛戍区八三四一部隊は、まぎれもない文革派の「手兵」ないしは「親衛隊」であつたのに、彼らはなぜこのようにもろかつたのだら

うか。この点を詳細にたどるべき情報がまだ不足しているけれども、今回の政変に際して、北京以外の軍が動いた形跡はないようであるので、やはり、陳錫聯率いる北京軍区の人民解放軍が華国鋒指導部を支持して大きな役割をはたしたか、さもなけ

はやくも、毛沢東批判か？

その十年間、毛沢東体制を支えて中国の政治を方向づけ、まさに「帝王」の威を借りて「階級闘争」の名のもとに政治をほし、いままでしてきたいわゆる文革派の最高指導者たち、江青夫人、王洪文、張春橋、姚文元らの面々が、今回、一網打尽に打つてとられたという。この衝撃的なドラマを面前にして、中国

それが慄然とするほどの苛烈なドラマであつたにせよ、文革派がこうして一挙に失墜してみると、それまで毛沢東神話に陶醉していた人びとでさえ、過去十年間の中国の政治にはあまりにも無理と理不尽が多すぎたことに気づき、文化大革命が畢竟、大いなる虚妄であつたことに目覚めるであらう。いや、中国民衆は、すでにそのことを十分に知りつくしており、いざれ今日の来るべきことを心に期しているのかもしれない。その意味で

このすさまじき「背徳」。だが、そのような行為をあえて犯さざるを得ないほどに、中国の権力中枢における角逐は過熱化していったのであり、皮肉にも、文革派の指導者たちがこれまでしばしば強調してきたとおりの激烈な「階級闘争」「食うか食われるかの闘争」がそこには存在していたのである。

それにしても、去る四月の天安門事件に際して暴動民衆を徹底的に鎮圧した首都工人民兵や中央警衛団としての北京衛戍区八三四一部隊は、まぎれもない文革派の「手兵」ないしは「親衛隊」であつたのに、彼らはなぜこのようにもろかつたのだら

うか。この点を詳細にたどるべき情報がまだ不足しているけれども、今回の政変に際して、北京以外の軍が動いた形跡はないようであるので、やはり、陳錫聯率いる北京軍区の人民解放軍が華国鋒指導部を支持して大きな役割をはたしたか、さもなけ

週刊読売



華国鋒主席

れば、八三四一部隊を率いていた汪東興政治局委員（党中央弁公庁主任）が、文革派に背いたとも推測できよう。思えば、汪東興は、かつての陳伯達や林彪と同様、永らく毛沢東側近の配下ではあったが、彼らはいずれも文革派とはいえ上海グループではなかった。この点は、華国鋒も同様である。したがって、かつ

ての陳伯達や林彪が同じく文革の推進者であり、むしろその中心的な担い手でありながら上海グループからはじき出されたように、いずれは江青夫人中心の上海グループからはじき出されるべき位置にあったともいえるのである。それだけに、もしも今回の逮捕者のなかに汪東興がいないとすれば、汪東興の「寝

司令、許世友・広州軍区司令、李徳生・瀋陽軍区司令らの「黄安グループ」は、華国鋒を強く支持したものである。こうして華国鋒は、文革派の一挙失墜という重大な代償のうえに党主席に就任することができたのであった。

彼は、昨秋の大寒農業会議が江青と鄧小平の対立で膠着したとき、折衷的な役割をしたこと

科学技術の四つの現代化」を求め、折衷的な役割をしたこと

返り」は明らかであろう。いずれにせよ、軍首脳は、李先念らの実務派長老とともに、上海グループと対立してきたのである。とくに李先念と同じ湖北省黄安県出身の実力者三軍人、陳錫聯・北京軍区

こうして中国内政はいま大きく旋回しようとしている。すでに鄧小平側近の万里鉄道相が復権したとも伝えられているように、いまや鄧小平の復活も当然の可能性として考えられねばならないであろう。しかも鄧小平は、毛沢東政治の転換を求め、毛沢東神話から離脱して「四つの現代化」（農業、工業、国防、

科学技術の四つの現代化）を求め、折衷的な役割をしたこと

勤続10年。

この子のために



災害死亡倍額支払
逓増年金付

大きな安心

一〇〇万円(満期)のご加入で四、四八〇万円
(一時金一、〇〇〇万円+かえる家族年金一〇回合計三、四八〇万円)
の大型災害保障です。

★悪性新生物(ガンなど)・糖尿病・心疾患・高血圧性
疾患・脳血管疾患による不時の出費の保障のために、
日産の成人病特約をあわせてご利用ください。

■詳しい資料ご希望の方はS・Y係まで
日産生命保険相互会社
〒153 東京都目黒区青葉台3丁目
☎ 東京 (03) 463-1101(大代表)